



改刊之辭

回顧すれば去る明治三十四年我々の此地に... 多少の變遷を経て校基益々確く卒業生を出...

の体裁は之を縮少して新聞体となすと同時... 月刊一回の月刊雜誌となすの勝れるに若かず此の如くにして始...

ての前提は擱筆して雜誌なごて閱た獨塊諸... 國の狩獵狀況の一般を御參考に供したい所...

本誌目次
●改刊之辭 ●狩獵 ●ホルル氏土
●學 ●森林經理の原理 ●シユリ

明治四十四年十月二十五日印刷
明治四十三年十月二十七日發行
(非賣品)
編纂發行所
長野縣立校友會

狩獵論

江波多

林業と狩獵とは密接なる關係ある事に就い... 借料金は一ケ年四千元位であるうな尙此

の外に野獸が附近の農林地を荒した場合は損害を賠償する責があるから容易でない然しながら貴族富豪は争つて獵區を借入れて其中の適當なる個所へ狩獵の爲めに特に別荘を作つて自分の親友知己を招待して歡樂する一つの交際機關になつて居る獨逸兩皇帝の如き熱心なる遊獵家で各所に獵區を附屬の離宮を建設せられ本年初めに獨逸國王帝佛大統領王匈牙利王と某獵區に相會せられ娛樂以外に國交を温める外交上の機關に利用される英國前皇帝なども狩獵を好ませられ御崩御前「ウエネストノーホーク」或は「サントリンハム」などで狩獵をせられた實景が活動寫眞にまで出來てある

我皇室に於かせられても伊豆の天城山京都市の北なる雲ヶ畑千葉縣宮城縣などに禁獵區を設けさせられ外國貴賓並に日本臣民の動功著しき者に獵を許させられて勞を慰らるゝ事あるやに拜承して居る斯る状態であるから林業及狩獵博覽會が度々獨逸其他の國々に開催せられ各國皇帝も進んで出品せらるゝのみならず其年維納に開かれた狩獵博覽會には獨逸皇帝は勿論、瑞典王も臨御された様である。然る處鹿の角と獵區に於ける鹿の繁殖状況の寫眞との陳列會場を壓して居るので他に狩獵統計著書並に鹿以外の野獸に關する陳列品もあるが實に鹿の博覽會と謂つてよい云ふ風であるから貴族所有の獵區には實際奈良公園の夫れの様には鹿が群をなして戯れて居る鹿の事に就きては後日に譲るとして兎に角日本で木曾山中と言へば皆木曾路を通つた事のない人は熊、猪、鹿、其他の野獸が隨所に見出し得る事の様に推測されるのであろうが事實は正反對で足跡を見出し得ない野獸の多くの種類が絶滅するは、遠からぬ事と思はるゝが何とか濫獲を節して日本の國情に適する保護繁殖法を講じたいものである

ホルム氏土壤學土壤の生物抄譯 (河野)

土壤は有機物の上に絶えず働きつゝある緩慢なる化學的變化を起さしむる床にして化學的變化を受けたる動物植物の殘骸の土壤に供給せらるるときは腐植質と稱し土壤を暗色に變せしめ更に進んで腐植質は遂に炭酸瓦斯水確酸及び其他植物の養分たる簡單なる物質を生ず此の變化は古來單なる化學的變化に過ぎず認められたれども近來に至り耕地一面に配布され吾人と最も親蜜なる關係を有する高等なる生物と等しく營養繁殖生及び死の法則に従ふ微細なる生物の生活作用に依ることを知るに至る

土壤に於ける顯微鏡的植物は大畧微及び細菌となし未だ精密なる研究を遂げたりと言ふを得ざるも土壤中物質のある變化は特種なる生物又は生物團の助けに依るものにして是等變化の大部分は植物の營養上欠く可からざるものなり

土壤中に於て最も注意せらるる微生物は植物に窒素を供給するに關係を有するものなり或種の含窒素有機化合物主に蛋白質の如きは土壤中の細菌の作用に依りアミノ酸の如き簡單なる物質となり尙進んでアンモニアとなる此のアンモニアは他の生物の作用を受け酸化により亞硝酸酸及び硝酸となるものにして此の化合物は高等植物に窒素を供給し得る唯一の態なり之れに反し時に他生物の働を受け硝酸の生産に反對なる作用を引き起し窒素を遊離し空中に散失し土壤中の窒素を減少せしむることあり

種々の生物は遊離窒素を取り炭素水素酸素と結合せしめ高等植物に攝取し得可き形となすかかる生物は時に葉綠粒を有する高等なる植物と共生して働き兩者は相互に直接なる關係を有し細菌は消費する炭水化合物を高等植物より取り化合態窒素を供給す

土壤の表層は常に地上に繁茂せる植物の葉動物の糞尿其他動物植物の殘骸の肥料として耕地に施用せられたるもの等に依りて有機質物を加へられつゝあるものにして是等の物質は普通土壤に於て速に變化を來し其の構造を失ひ暗色を呈する腐植態となり窺に投入せらるるときは直ちに焼失す是等變化の微生物の働きに歸因するは土壤をクロロホルム又は鹽化水銀の如き防腐劑を以て處理し或は熱を以て殺菌するときは此の變化の停止するにより明なり

土壤中に生存せる微生物は驚く可き多數に達す即ち表層一立方厘米に二百萬より多きは五千萬を超へ實に土壤は他の腐朽せる有機質物と同じく微生物の住所たり

土壤の細菌は常に微及び酵母と相供なひ殊に土壤溶液の酸性反應を呈する場合に然り微生物は深き亞表土にも生活すと言へども表層に最も多數生活し或る深きに達するときは全く消失するものにして之れ深き井水の履々無菌の状態にあるを以て知る

土壤中に於ける有機物の變化は大別して二種となす即ち酸素の供給充分なるとき起る分解及び其の供給不十分なるとき起る腐朽之れなりかかる變化は枯枝の地上にありて變化するものと及び泥土に埋没せられ變化するものとを比較するにより明なり即ち後者において酸酵作用行はれ木材は黒色に變じ炭酸瓦斯沼氣等を生じ比較的炭素に富み酸素に乏しき物質となる然れども變化は漸次衰へ物質の消失止み原形の大部分は消失することなく存在す之れに反し枯枝を空中に曝すときは暗色に變することなく微生物の働きを受け漸次分解して炭酸瓦斯水

アンモニア無機酸鹽となり恰も窺の中に於かれたる如き結果を來す此の云々の變化は土壤中に常に進行し通氣排水温度耕転等の如何により其の一方が他より優勢の位置を占むるものなり(未完)

シユリツヒ氏森林全書(續) 小松吉次郎 譯

第二章 森林間接効用

凡る植物の生ぜざる裸地は終年太陽風雨等の作用所謂氣象上の變化に暴露されども植物の繁茂せる土地殊に鬱々たる林地は此等の勢力を都合よく調整して反て有効に土地に作用するものなり即ち其等の状態は

(1) 樹冠は光線及降雨を中途にて遮ること恰も彼の屋根の如くにして暴風の速力を弱め或は夜間地熱の放散を防止す

(2) 葉花果實等は樹間に落ちて遂に朽土となりて地表に推積し寒暑の變化より來るべき土地崩壊を防ぎ土砂の流失を押し止し地中に空氣を保持す

(3) 樹根は地下にありて網狀に擴張してよく土壤を結合す

以上の効用は古來世人の知る所にして其記録をも少からざれば近年此等の効用の傾向あるものゝ如しされば近年此等の効用の信すべき結果を得んとて種々なる試験を行ふに至れり即ち佛國の「バックエレル」氏、獨逸の「ニルトリンゲル」氏を初めとして幾多の學者は森林の内外に於ける氣象上の關係を研究して森林の効能を究めんとせり試験の方法は何れも大同小異にして數多の觀察地を密林中に或は廣開地に撰定し氣温濕氣等の比較研究を行へり勿論此等觀察地土地の高度土質其他四圍の状態は可成同一の地を以てせり「エーベルマイヤー」氏は七ヶ所の試験地に從事せり以て伊太利晉國等も之れが研究に従事せり今間接効用の主なものを上ぐれば下の如し

森林内温度變化 (華)

森林外の開放地	樹冠内
地上五呎	地上五呎
春	-1.24 - 0.59
夏	-2.54 - 1.48
秋	-1.13 - 0.41
冬	-0.61 + 0.05
年平均	-1.04 - 0.41

(1) 氣温及地温に及ぶ森林の効能
(2) 空中の濕氣及降雨に及ぶ森林の効能
(3) 森林の機械的効能
(4) 森林の衛生上に及ぶ効能
(5) 森林の美術上に及ぶ効能

第一節 森林と氣温及地温

果によれば何れも皆森林は空氣温度を減少するものなり即ち北緯五十度の地に地上五呎にて林内温度は開放せる地より華氏一度樹冠内部にては五度を低減するを示せり茲に開放地とは全く山間地より平均温度高く又平原地より幾分低溫の地に於て森林より遠かるる所に面して鬱蒼たる常綠林は最著しく此事實を示し落葉せる疎林は温差小なり故に林内温度は樹冠より地上に接近するに從ひ漸次に増加するものにして殊に温差上吾人に至大の關係を有するは年平均温度の差にあらすして四季の平温度の差と森林内温度の林外温度より低きは一にて示し高きは十にて示すこと以下皆同じ

森林外温度變化 (華)

一月	七月
最低	最高
+2.12	-8.37
+4.28	-4.61
+2.12	-4.14

故に林内の温度の差は開放地に比して夜間に最高にして晝間に小なり且其差は夏秋に大なり此等の事實より推定すれば森林は温度の最高最低の兩極を緩和する効ありとの結論を得べし更に森林内外の温度の差を最高なる七月と最低なる一月の觀測を表示せし「トート」林又は「スコット」林は「ブナ」林は夏時密生せる樹葉の爲にして冬間は落葉するを以てなり又「スコット」林は唐檜より樹葉粗なる故なり而して森林外部に設けし觀測所は稍々森林に接近せしもののみならずしかば此等の觀測所を遠隔地に設けるときは森林の影況を少しも受けざるを以て此等の事實は更に大なるべしと想像せらるゝに至れり而して此推定を一層確實にせんことを種々なる方法を講せられしが遂に獨逸の所謂放射的觀測を開始せり此觀測は比較的

森林外温度變化 (華)

一月	七月
最低	最高
+0.81	-3.87
+3.15	-7.42
+2.59	-4.00
+0.95	-1.96
+1.85	-3.91

密生せる森林の中央より各方向に向て森林外部まで所々に観測所を設け其森林を去る遠近によりて生ずる気温變化の關係を試験するものなりと此試験によれば森林が空気温度に及す範圍は森林に接近せる地方のみならず又「ドクトル」ウオアアイヨフ氏は廣大なる森林の気温上に及す効果を説明せん爲に彼は海面高六百五十呎にて同緯度の地を數多探定し七月の平均温度を求めき氏は気温は大西洋より大陸に入るに從ひ漸次増加し海岸に近き「グエルセ」遠き「ヌラミ」チンヌス「ク」の間に十三度二分の増加を見「リスボン」「ク」の間に十三度二分の増加に十一度五分の増加を示せり然れども此漸次的気温の増加は所々中間にて妨げられ反て低下を示せるは即ち森林の存在に歸すべきものなりと彼等は北緯五十度の「プロメンホフ」にて第一に低下せり此地は「パリア」に「ボエミア」の國境に存在する大森林に接近せる地より更に東方「トロバ」にて温度は再び増すも尙國の「カルバシアン」の溪谷密生林に近くに従ひて再び低下せり此の如き結果は即ち大森林は気温に影況するも幾何の程度まで影況するや未だ不解の問題なり

苗圃に於ける施肥に就て

西澤 静人

人誰れか一日たりとも食なくして可ならんや苟くも其健全を保たんと欲せば必ず先づ蛋白質脂肪等の諸養分を攝取せざる可からず亦植物も然り常に何れよりか其營養分を得て始めて能く成長し能く開花結實するものならざるべからず其養分は空氣及土壤より之が供給を仰ぐれば種々の實驗によりて既に證明せられたる所なり然れども植物養分の天然給源就中土壤に含有する養分は決して永久無盡蔵なるものに非らず

若し同一苗圃に於て人為的に養分を供給することなくして連年苗木を栽培するあらんか漸次其主要養分の欠乏を來し完全なる苗木を仕立能はざるや亦明なり斯の如く植物の主要養分に欠乏せる土壤に於て苗木を栽培して完全なる發育を遂げしめん欲せば勢ひ人為的に之に相應せる養分の補給なかるべからず此補給養分を肥料と稱す而して現今苗圃に肥料として使用せらるるもの其の類種々ありと雖も就中人糞尿、牛馬糞、鳥糞、魚肥、骨粉等の動物肥料又は草木灰、泥炭灰、朽土等の植物肥料、若くは石膏、肥土、石灰土、磷酸、加里、等の礦物肥料或は堆肥、厩肥、等の如き混交肥料其他干糞、油粕、粕、腸糞、大豆、酒粕、等を主なるものとす

以上の諸肥料中には或は窒素、磷酸、加里の三成分を有する完全肥料あり或は特に其二成分に富めるものあり一様ならざるを以て苗木及び土壤の種類に應じて之が選擇施用せざる可からず尙施肥の妙を得んとせば須らく土壤の吸肥力に就き一般の知識を有せざるべからず一凡そ土壤は溶液中の養分を吸収保蓄するの性あり之れを土壤の吸肥力と名く一若し土壤にして此性なくんば肥料は降雨又は灌溉排水毎に流亡して林業上非常の損害を蒙るべし故に此吸肥力の強弱たるや施肥に多大の關係を有するを以て少しく土壤につき施肥法並に施肥の注意すべき要点を述べん

第一 施肥の方法

肥料を圃場に施與するに際しては先づ堆積場若くは其貯藏所より之を取出し能く粉碎又は水肥とせざるべからず若し圃地あるものを直ちに施與するが如き事あらんか土壤中に於て分解すること一様ならず爲めに苗木は其成育に不揃を來すの恐あるのみならず又養分の土壤に吸収せられざるに風雨あらんか貴重成分の流亡を招き却て無肥料の地に及ぼさる結果を見ることなきにしもあらず故に之を施與する前に於て能く粉砕又は水肥となさざる可からず而して之れを圃場に施すの方法に二種あり即ち一は直ちに圃場の表面に撒布するもの一は地中に施與するもの之れなり前者は先づ圃場全面に撒布して直ちに土壤中に浸入せしむる手續をなし長く空氣に曝露すべからず是れ空氣に觸れしむること長きに渉るごきは含有成分の散失するの恐れあればなり殊に傾斜地又は多量の施肥をなすが如き場合には最も速かに翻き入るるを要す後者は播種又は移植前に地中に充分に耕し其の内に施肥し漸次苗木の發育に伴ひ養分となるの肥料を講せざる可からず尤も此際於ける肥料は充分に醗酵せしめて虫卵を逐殺せしめたる後使用すれば虫害の恐あらざるものとす尙主なる土壤につき述べれば

一 砂土 本土は石英の大部分に粘土の少量を含むるを以て養分を含蓄すること少なきのみならず吸肥力缺乏して降雨の際には肥料分流失の患あり尙空氣の流通佳はなるを以て稍々分解し難きもの又は未熟のものを施すに適し更に吸肥力微弱なるを以て可溶性肥料は一時に多量を施すを避け可成數回に分與すべし要するに骨粉、魚粉、厩肥、堆肥、血粉其他農林産物製造物の殘滓等を施すに適するものなり

一 埴土 本土は五割乃至七割の粘土を含み強き密着性を有し地中に空氣浸入すると少ならず且水を多く吸収し得て泥沼地となり易く亦濕潤の時は甚しく粘着し乾燥のときは甚しく硬凝となり比較的養分に富むるを以て施肥量は前者に比して少量にて可なり就中窒素加里を多く要せざる處は磷酸肥料を施

せられドライロット又はハウス・ユウムとして喧傳せられたり隨て豫防法研究せられたれ共未だ充分ならずして尙繼續しつとありと云ふ、ボリボラス・ボラリヌス菌は通例十月より十一月の間に電柱の地上に露出する部分に結實体を生ず其状態も靱皮を張りたるが如し此結實体より數十萬の孢子を生じ風によりて飛散し附近の木材に附着して茲に繁殖の素因をなすものとす然して此菌類は十五年以來の觀察によるに本邦至る處の建築物其他の木材に繁殖し電柱建設地附近にも夙に此菌類の繁殖する地方少なからず然も電柱の被害少なきは又孢子による繁殖の不適當なるによるべく然して一度此菌類の寄生により腐朽せし電柱の地下の部分を切り残し之に接して新柱を建設する時は二年を経過せざるに既に甚しく腐朽するを見れば菌類による繁殖の容易にして且迅速なるを知らるべし菌類には二種あり一は普通の菌類にして一は菌類束なり其他尙甚しく乾燥せる電柱の組織内には厚膜子を抽出し得るも厚膜子が繁殖の原因をなすは極めて稀なりとす菌類は楕圓形をなし無色なり其發芽時数は攝氏二度より八度にありては二十四時間十六度なれば十八時間にして發芽すると云ふ茲に於て此菌類の孢子は秋末に熟して飛散するや直に發芽して菌類となるものなる事を知れり次に此菌類の寄生せし電柱或は杭柱の根除を秋末に發掘するや恰も白糸を束ねたる房の如きもの、纏綿するを認むべし之れ菌類束なり此菌類束により此菌類は土壤中を透過して附近の木材に蔓延するものにして從來の傳播の経路は主として此菌類にありたり之れ電柱被害の原因が菌類にある事認識せられざりしが故に腐朽電柱の地下部を全く除去せざるのみならず之に接して新柱を建設するを以て

文苑

福田生

被害電柱の地下に残存せる菌類より直ちに菌類束を出し新柱に傳波するなり

一、普通の菌類の寄生に原因する腐朽の防遏は丹麥注入を以て足れり

二、ボリボラス・ボラリヌス菌力孢子により丹麥注入柱に傳播する速度は比較的緩慢なるも菌類により傳播する速度は甚だ大なるにより此菌類の寄生する木片を健全なる電柱其他用材に接觸せしめざる事に注意すべし

三、ボリボラス・ボラリヌス菌に對する防腐法は菌絲の接觸を防ぐを第一となすに足り他の材料もクレオソートの注入或は時々塗付を以て足れり

森林の刺戟 紅葉の森の奥深く逍遙て見よ 吾等を酔はしむべき森の香は快く 脈を打つのである、森の草づれ梢の鳥の囀き甘き吐息歡樂に満つた瞳よ、其利那美しい情緒が胸に漲るのである、胸中には深い鮮明な印象を刻むのである、うして純粋なる文學が味はれるのである

森林と水源 鬱々として生じて居る森のほとりへゆく清冽なる水は木々の葉をくぐつて水面に可愛い水輪を作つて流れて居るを見るであらう？ 嗚呼之が抑も彼の洋々たる大河の源をなすのである

森林と洪水 長雨の續いていつか小川の水が増してやがて大河が汎濫する苦痛にやむ人々飢に苦む人々其は悲惨の極である、思へ人々若し吾人が雨中山中に迷ふ時白雨は油然たりとも林中は尙靜かなるものだ、雨は一度木の葉に當つて碎けて左右前後にちるもの然してここに下草や苔がある又木々の根がある之等はやがて雨の一時に流れ出すのを防ぐ材料となるのである

九月拾八日陰曆仲秋に當れるをもて寄宿舎内に親月會の催あり席上餘興として種々なる題目を列擧し合生をして之に適當せるものを互撰せしめし結果いかにも面白かりければ聊か左に出鱈目をものしつ(盲蛇生)

吹立つる音も一入かまびすし 市川

狭き舎内のラッパなりせば 山本

名からして其傳分のばるる 石曾根

元祿武士の伊達姿を 瀧澤

辛抱に名もふさばしき石曾根を 瀧澤

大食官 瀧澤

瀧澤に名をばり并ひ垂らん 瀧澤

朝日さすあたりまばゆき枕邊に 安藤

畫あんどうをなほほしつて 長谷部

なせば成るものにしあればたしたして 小林

ちりつつかややむべかるべき 小林

愛嬌は社交の實似て非なる 代田

たいごちこそはなもたらぬ 代田

何にしろたが目に見ても如才なき 濱

個人主義 濱

唯我獨尊漢個人主義 濱

瀧澤は獨立白尊漢運は 濱

御大盡 伊藤

からき世の味をもしらせのどかに 伊藤

潮のまに／＼世を渡るなり 伊藤

物しり 伊藤

せかれてもなほ市川よどかなく 伊藤

水はながれて盡きぬと思ふ 伊藤

呑氣家 市川

華嚴淺間は鐵道もたへぬる 市川

世にのんきころ有り難かりけれ 市川

寄生虫 市川

此のつら皮を厚くして 市川

寄生虫をば我もまればや 市川

破裂して水電程の効あらば 市川

かんしやく玉も大和たましひ 市川

大學者 萬巻を腹に入れれば生かせし 藤 田
 奇人 ぶしたる虎は猫にをされり 吾 妻
 寛水の三崎の程にあらはなれ 伊 藤
 トシヤンカンには我は興せず 藤 原
 かん達ひ間違ひ狂ひさるるも 梨 原
 神 經 家 ないさうべきスマツジン
 さりとして苦勞をなせばはてしなし
 木曾山の紅葉をよめる數首のひとつ
 もみちばのふつきたにまにわけければ我身もうま
 るこころすれ 安井正夫
 思ひけるかな 遺 稿
 我木曾山林學校創立の當時西筑摩郡
 長之職にあり大に其事に盡されたる
 渡部秀之助君には其後北佐久郡長に
 轉任し尙更級郡長となり同所に在職
 中去年九月の初病の爲遠逝せられし
 ことを遺族の方よりしらせ越ければ
 追悼の和歌よみ送る
 二人してみんさ契りし娘捨の月はなみだのたれと
 ころなれ 菊
 年毎に我身の老も白菊の花のさかりに逢ふが嬉し
 ればかたの花よりあこに咲きいでとひり色香を
 しむる白菊 竹 軒
 いっしから木曾路の標さきにけり思ひしより早
 き春のな 入峽雜味
 この春は木曾のやまへの山人となりてこころみれ花
 のさかりを ことりぬし木曾の里人うちむれて櫻狩する時はき
 こりにけり 雲かゝる華の杉むらかみさびてくからしらす泉
 のなく おもひやれ木曾の河波れさふけて枕にかまふこゝ
 るにそさな 〇御嶽六首
 めぢのかきりちつときたる山道のそのいやはて
 に蟻の人のく 〇御嶽はせくもあつて空に立
 てりけり

通信

さるながせ風にかよきてひさしきりふりくるもの
 はつがの葉の雨 荒山のいはのなだれの上にてる月かけすく神代
 なからに 山づみの人をくすしみ忍びくるあたまもしるく夜
 はふけにけり(頂上の小屋に宿りて) 山のへの露さきまほもすまほのなほはよるづ代に
 くちじまほ思ふ(開山行者覺明の像に臨して)

校舎の新築進捗して來年五月には完成
 を見るに至る可く中央線の全通亦其頃まで
 になる可し
 木曾路の交通の不便先づ去り校舎の完備な
 らんとす賀す可きかな
 本年度の苗圃の成績良好にして床替の扁柏
 枯死せしもの少く播種せし松杉扁柏金松
 皆善良の發芽生を見る
 修學旅行は毎年二年級は大和地方に三年級
 は東京に決定す
 九月十二日一二年級生徒は西澤新河野三
 教諭と共に御嶽に三年級生徒は校長長征矢
 野の三先生と共に駒ヶ岳に登る
 今學校より縣廳に致せし復命書により其詳
 細を報せん
 旅行に先づ二日校長は生徒を講堂に集め日
 韓合邦の願末を説き國民將來の覺悟につ
 て戒しむる所あり且曰く此千載一遇の秋に
 當り誠意を以て國家の隆昌を祝するは國民
 たるもの至情なりされども徒らに浮華を
 たるとして所謂祭禮的祝賀をなすは大に取
 らざる所本校は此に鑑み高山の跋渉を企て
 らるる困苦と缺乏とに堪へ以て質實剛健の
 氣性を養ひ將來の負荷に堪ふるを以て聊か
 祝賀の意を表せんとす此趣旨に本づきて
 生徒の携帶品を各自米八合味噌二十匁金三
 十錢と定め此外提飯雨具防寒具等の準備を
 なし生徒五人を一組として相離るる事勿ら
 しむ
 十二日晴午前四時五十分校庭集合人員の点
 檢を了し五時出發中畑を経て矢久保峠を越
 え下中澤村を経て黒澤に至る一試す福嶋よ

らす八時半八合目は道や平坦七合
 目を經て田の原に出で樅梅等の鬱林の中木
 造の階段を下るこ一里半六合目に至りて
 一休憩す十時半より更に險なる急坂を下
 る或は粘土の雨に濕る所に遇ひ迂りて倒
 るものあり頗る危険を極む雨益々密を加
 へ衣袂悉く濕ふ十二時王瀧村に着し米を飯
 に代へて空腹を癒し勇を鼓して川合峠を越
 え橋戸の絶勝を眺め行々王瀧川の清流に沿
 へて下り午後四時半歸校人員點檢を終へて
 解散せり此日行程九里半
 此行二日行程併せて十八里半道多くは險惡
 特に十三日の如きは終始雨に遇ひ具さに困
 苦を嘗めたり而も生徒は最少年者も雖も能
 く此痛苦に堪へ辛酸に遇ひて氣愈々剛に一
 の落伍者を出さざり蓋高山に攀登せんこ
 するや英氣既に自ら勃然たるものあり懦夫
 も亦能く立つ殊に團體登山にありては或は
 多少困難する者ありと雖も自ら能く元氣を
 鼓舞して敢て衆に後れざらんとす故に弱者
 も時に壯者を凌ぐの概あり要するに此行生
 徒の士氣を振ひ剛健質實の氣性を養ひ得た
 るは頗る顯著なるものあり加之山上の靈氣
 に浴して自ら汚穢の心を去り大自らの靈光
 に接して冥々の中感得の偉大なるものあり
 しは信じて疑はざる所なり
 名士の來訪としては五月盛岡高等農林學校
 教授林學士上村勝爾氏同校生徒三十余名と
 共に修學旅行の途次立ち寄らるるあり七月
 には東京帝國大學農科大學林學科教授林學
 士堀田正逸氏同校實科生三十余名と共に修
 學旅行の途次立ち寄られ一場の講話を乞ひ得
 たり
 來る十月十五十六兩日長野師範學校庭に於
 て長野縣中等學校競技會開催の筈につき我
 校庭球部よりは三組の選手を送る事に決定
 熱心練習中なり
 選手人名左記の如し
 木村 康明 伊藤 昇士 中澤淳四郎
 杉本 直 安藤 次郎 吉池三九郎
 藤卷壽一君より通信
 藤卷一別以來引續き御無音に打過ぎ誠に申

譯も無之多罪高志を祈る處に候と校長先
 生始め諸先生には如何御起居被遊候哉定め
 し御勝健の事と奉推察候御會は年一年と諸
 先生の御熱誠なる御教導により益々隆盛に
 赴かれ實に號の進む毎に活躍せる記事御掲
 載に相成り誠に喜し次第に奉存候茲に在
 校會員諸氏の勞を謝し奉り候殊に今回江畑
 會長殿の「校友諸君に望む」の一誌は最も小
 生等の鑑む可き事にて拜讀中只管慚愧の至
 りに不厭候不文ながら一筆申上候然し林業
 は其研究の範圍廣く到底淺學の小生等の如
 きは未だ何等の實驗も経験も無候へば一
 寸左に今日迄の消息申上ぐべく候陳者小生
 事去る四拾壹年四月拾八日青森大林区署よ
 りの召喚により郷里出發全月廿三日着青
 野二拾四日例の相場にて雇拜命と同時に遠
 野小林區署在勤を命せられ依て全月二拾八
 日發青森岡一泊の上廿九日夕無事赴任致し
 候爾後内外兩務補助仕内務は約九ヶ月に
 して司法事務を除く外一班を會得仕り外業
 造林四拾一年春季新植は當時既に終了致し
 只秋期補植に三日間許り從事せし如き次第
 にて別段見る事も聞かず其年は不了
 工植に終り翌四拾二年には經常部造林扁柏人
 其の外の外業としては立木調査伐採檢査引渡
 只造林は遠に青森管内造林小林區署丈に幾
 分の研究の餘地も有之小生も之には非常の
 熱誠と注意を拂ひ申候即ち明治三拾五年
 (非常の密植に付き)又手入固定防火線臨時
 防火線等續々有之候抑造林事業の如きは其
 關係する所廣く中に一定の判別を得るには
 植栽當時よりの経路の觀察を要し候も身當
 時森林保護の職に無之爲めに只枯死の結果
 を伺ひし位に御座候依て新なる實驗も得申
 さす候(然し幸にも小生昨年擔任せし扁柏
 人工植栽は大いに成績宜しく夏期刈拂の節
 既に餘程伸長致し居り又生存歩合も九拾五
 分の事此頃遠野小林區署長よりの通信に

寄宿舎通信

有之候(處に突如昨年九月本官に任用と
 時に青森縣北津輕郡小泊村小泊小林區署第
 三號保護區に轉勤の事と相成り爲に岩手方
 面の事情研究は頓止せられ此度は幕代りて
 盜伐犯研究の本場に罷越し申候當地の状況
 に付きては未だ申上げ難く候只同輩山梨農
 林出身川原瀬戸の両君相會して事毎中々困
 難頭腦が病めるなど申合せ共に慰居る次
 第にて到候小生等の幼稚なる頭にては齒も
 立兼ぬ申候今苦辛が修養と馬車馬的の努
 力罷在候目今の所人を被害防禦に對し及々
 として日向足らすと申す次第猶更技術の方
 位は充分に手出し兼ね候へ共小面積の造林土
 として獨立致し居り候造林中ヒハの天然更
 新は小生等の大いに研究すべき事項と考へ
 居り申候次には前後在勤地附近の状況を列
 記可致候(未完)

今春三月第九回の卒業生諸君を送つてから
 寄宿舎は急に寂しくなつた在校生は歸省す
 る空家に電燈は御無用となる舎前を通行す
 るにも恐ろしい位寂しかつたさうだこれは
 鼠公が得意の怪癖で話したのを聞いたのだ
 さて學年がかはつた四月の四日開舎した
 其夕方馬鹿に元氣のよい連中が遣つたであ
 た、これは歸省中の在校生が歸舎したのであ
 ら、それから組長室長の新選室長大掃除等
 で大騒ぎをやつたら留守番隊長鼠將軍は逃
 げ出してあつたら留守番隊長鼠將軍は逃
 ら此月に二つの特筆すべき事があるそれは
 學校で共同購置組合、寄宿舎で圖書室を創
 設した事だ、共同組合は全校の職員生徒の
 合同組織で寄宿舎第一室を事務所とし學用
 品は勿論日用品迄頗廉價に賣るので誠に好
 都合で且経済的だ委員は生徒の互選で一學
 期毎に改選するのだ、圖書室は元の病室を
 清潔にし加工して之にあて學校職員と舎生
 まで經營して居る圖書費として月に五錢宛
 徴収して居るがこれで主たる新聞雑誌は勿論
 其他の圖書も見る事が出来る、資本が多

